

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 6 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20530553

研究課題名 (和文) 特別養護老人ホーム職員への死生学教育プログラムの開発と効果測定

研究課題名 (英文) Development and Evaluation of Death Education Program for Nursing Home Staff

研究代表者

藤井 美和 (FUJII MIWA)

関西学院大学・人間福祉学部・教授

研究者番号：20330392

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：死生学教育、特別養護老人ホーム、効果測定

1. 研究計画の概要

本研究は、「対人援助職の現場での専門職者の死生観を構築する必要性」に焦点を当て、福祉専門職者(特別養護老人ホーム看取り介護スタッフ)への死生学教育プログラムを開発し、効果測定することを目的としたものである。4年間の研究計画は、(1)死生学教育プログラムの前提となるニーズ調査(平成20年度)、(2)死生学教育プログラムの開発(平成21年度前半)とプログラム実施(平成21年度後半-22年度)、(3)死生学教育プログラムの効果測定(平成23年度)である。

2. 研究の進捗状況

(1)死生学教育プログラムの前提となるニーズ調査(平成20年度)

①大阪府社会福祉協議会老人施設部傘下の特別養護老人ホームにおいて看取り介護を積極的に実施している4施設8名の介護職者、2施設の施設長へのフォーカスグループインタビューを実施。看取りに必要な価値観、死生観、サポート、具体的なケア、必要なサポートについてニーズ調査を行った。

②ニーズに基づき死生学教育プログラムに必要な項目を抽出した。

(2)死生学教育プログラムの開発(平成21年度前半)とプログラム実施(平成21年度後半-22年度)

①死生学教育プログラムの開発(平成21年度前半)：平成20年度の調査から死生学教育へのニーズ項目をもとに、教育プログラムを作成した。プログラムは、死の捉え方を基本としミクロ(個人)メゾ(家族・ケアの視点、ケアシステムの在り方)、マクロ(社会の見る生と死)からアプローチするものと、

1, 2, 3 人称から捉える視点から開発した。関わる側が死をどのように受け止めるかという、ケア者の死生観自己覚知と死生観の構築と、関わる対象としての死にゆく人の理解、死にゆく高齢者のニーズ、求められる介護、家族のケア、悲嘆とグリーフワークを中心に組み立てた。

②プログラム実施：看取り介護経験者で施設長が推薦した特養スタッフを対象に、開発した死生学プログラムを実施した。対象者は、平成21年度は(平成22年1月から2月の3日間)40名、平成22年度は(平成23年1月に3日間)33名、合計73名であった。

それぞれの死生学教育実施前後で、教育効果を測定するため以下の方法を用いた。死の態度尺度による死の態度測定。書き込みによる死のイメージ調査。自己の死生観の変化・死生観研修で得たものについてのレポート。

3. 現在までの達成度 ①

進捗状況で述べたとおり、平成20年度-22年度までは、申請した研究計画通りに進んでいる。具体的には、平成20年度のニーズ調査、21年度のプログラム作成、21年度から22年度にかけて2回の死生観教育講座の実施であり、すでに2回の分析のうち、死の態度尺度における21年度、22年度サンプル別の分析を終えている。23年度で行う分析を一部進めていることから①と評価した。

4. 今後の研究の推進方策

これまでの3年間の研究を踏まえ、平成23年度は、当初の計画通り、プログラム効果測定の実行を行う予定である。

死生観の変化を測定する尺度として、平成21年度の調査で明らかになった効果測定尺

度の妥当性の問題を改善し、22年度では別の尺度で測定を実施した。23年度では、尺度についての分析と、生と死のイメージの変化についてのテキスト分析を行う。

最終年度は、まとめとして、特別養護老人ホームスタッフが、死生学教育によって、どのように死生観を涵養していくことができるのか、生きること、死ぬことに対するイメージがどのように変化するのか、目の前の「最後まで生きる高齢者」をどのように受け止めるのかを考察し、生と死に向き合う対人援助職における死生学教育の必要性について提言する予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)